

第3回日本放射線看護学会学術集会を終えて

After finishing the “The 3rd Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan”

作田 裕美

Hiromi SAKUDA

第3回日本放射線看護学会学術集会 会長
大阪市立大学大学院看護学研究科

Osaka City University

学会設立3年目を迎えた第3回日本放射線看護学会学術集会は、「放射線看護実践の知の集積から未来を展望する」をメインテーマに掲げ、臨床放射線治療看護・検査看護・IVR看護から産業・地域における防護ケアおよび看護基礎教育・研究に至る放射線看護の各分野を横断した多岐にわたる発表や講演による情報交換と交流の場となった。

学術集会の参加者は、395名と昨年度までと比較して増加した。これは、開催地が大阪市の中心部であり交通の便がよく全国からの参加が容易であったこと、会場が重要文化財でかつてヘレン・ケラーやアインシュタイン、ガガーリン等の国際的著名人が来日講演会を開催した歴史的場所であることも後押ししたものと思われた。

放射線看護の礎は広島・長崎の原爆投下による被災者ケアに端を発しているが、近年の放射線の医学利用の拡大に伴ってがんの診断・治療等で広範な国民に受け入れられてきたところである。このような中、3.11東日本大震災に伴って発生した東電原発事故の経験は、国民の中に強い不安を引き起こし、正しく放射線を理解したいというニーズをはじめとした放射線への関心が高まっている。診断のための検査やがん治療等の医療現場においても、患者から看護師に、放射線に関する基本的な知識や医療被ばくに関する具体的な質問が寄せられることが多くなった。一方、看護師の多くは放射線看護学に関する知識の不足（基礎教育課程で正規カリキュラムとして教授されていない）から、自信がない・患者の質問に適切に答えることができない等の現実が問題として浮かび上がっている。

今、まさに放射線看護実践が国民に貢献するために、実践を支える学問としての知識体系を構築する必要性に迫られている。このような認識の下で企画した本学術集会において特筆すべき成果は以下の2点である。1点目は、看護職能団体の代表 坂本すが氏と放射線防護学研究者であり放射線看護学の第一人者の草間朋子氏をお迎えしての基調講演および大会長 作田裕美を交えての鼎談を通して、放射線看護実践とそれを支える学問構築への道筋を参加者とともに展望できたことである。学術集会が専門家集団の内向きの議論に終始するのではなく政策提言に向かったことは成果に値する。2点目は、特別講演をはじめとして放射線と健康影響に関する参加者・市民の疑問に答えるべく企画した体験型市民公開講座や多様な放射線看護現場の現状から課題を見据えたシンポジウム等、放射線看護の今を網羅した企画の新味性を評価したい。

最後に全国からご参集くださった多くの皆様への感謝と、学術集会の企画段階から手弁当で駆けつけてくださり惜しまぬ尽力を賜りました企画実行委員会委員の皆様方、当日運営協力員の皆様方へ心からの御礼を申し上げます。